

記念展観「日本の近代化と仏教」によせて

——日本佛教学会二〇一二年度学術大会記念展観レポート——

中尾良信

記念展観企画の経緯

日本佛教学会の二〇一二年度学術大会は、九月十三・十四日の二日間、花園大学会場として開催された。共同研究テーマは「仏弟子ということ」である。加盟校から推薦された研究者により、さまざまな切り口でのアプローチが報告されたが、つまるところ議論が向かうべき方向は、一人ひとりが仏弟子としてどう生きるかという点につきる。これもさまざまな理解と姿勢があり得るが、その重要な基盤となるのが、先人の歩みから学ぶことではないだろうか。しかしながら、仏教史研究が盛んに行われる一方、近代仏教史に対する関心は必ずしも高くはない。特に、明治以降の日本の近代化の流れの中で、教団と社会がどのように関わってきたのか、個々の僧侶ないし宗教者がどのように行動したのかについては、より古い資料に比較して散逸の可能性も高く、早急かつ詳細な資料蒐集と検討がなされるべきである。

明治維新以後、日本がめざした近代化の波が大きくうねるのは二十世紀初頭前後、日清・日露戦争から「十五年戦争（日中・太平洋戦争）」にかけてである。この間宗教者、とりわけ仏教者がいかに社会と関わったかについては多

くの事例があるが、その中でも特筆すべきは、いわゆる「大逆事件」という国家的冤罪事件であり、その一方で異色の宗教活動を展開したといえるのが、伊藤証信の「無我愛運動」である。昨年（二〇一一年）が大逆事件による死刑が執行されてから百周年にあたったため、関係各所で記念イベントが行われ、また書籍の出版やテレビ報道番組でも特集が多く組まれた。しかし、特に仏教界においてはどうかということ、大逆事件で有罪判決を受けた高木顕明について、浄土真宗大谷派による顕彰の催しがあった程度で、内山愚童の曹洞宗でも峯尾節堂の臨済宗妙心寺派においても、管見の限りでは目立った動きは見られなかったと思われる。

花園大学人権教育研究センターでは、二〇一一年二月の現地研修に新宮を選んだが、これは大逆事件において一般に「新宮グループ」とされた人たちの中に、高木顕明と峯尾節堂が含まれており、おりしも峯尾と遠縁の関係にあたる日本体育大学名誉教授正木健雄氏（教育学）によって、那智勝浦町内（現在は新宮市内に移転）に設立された記念館を訪問することが目的であった。新宮市立南谷墓地には、死刑となった大石誠之助をはじめ、高木・峯尾の墓が点在していたが、大石の墓には案内板や解説板が設置されており、特に高木の墓には真宗大谷派による大きな顕彰碑が建立されていた。しかし峯尾はというと、佐藤春夫記念館辻本雄一館長の案内で着いたものの、案内板すらなく、崩れ落ちそうな崖下にひっそりとあった墓石は、禅僧の墓としての卵塔（無縫塔）ではなく、いわゆる一般的な角柱のものであった。もちろん、立派な顕彰碑を建てることのみが望ましいわけではないが、少なくとも一九九六年九月二十八日に宗門として擯斥処分を取り消したのであれば、そうした経緯を解説するようなものが設置されても良いように考える。筆者は二〇一一年五月二日付で、妙心寺派宗務本所に対して改善措置を求める進言書を提出したが、残念ながらその後も特なる動きは見られない。

一方で、妙心寺派を設立母体とする花園大学における近代仏教研究はというと、これも必ずしも胸を張れるような状況ではない。花園大学における近代仏教研究において、もっとも顕著な業績を残したのは市川白弦師（一九〇二〜

一九八六)である。小笠原秀実(一八八五〜一九五八)に師事し、臨済宗大学在学中から部落問題や教団改革運動と関わりを持ち、一九三五年に臨済学院専門学校教授となった。終戦後の一九四六年、結成されたばかりの日本アナキスト連盟に加入したり、一九五二年に京都市教育委員に就く一方で、一九六五年には「ベ平連(ベトナムに平和を!市民連合)」に小田実・開高健らとともに参加している。一九七二年に花園大学を定年退職して名誉教授となるが、教団批判や社会的活動のけじめをつけるとして僧籍を返上、還俗してしまつた。戦中、戦後を通して仏教の平和理法を説き、社会的活動に取り組んだため、特高警察に狙われたりもしたようである。戦後、伊藤証信(一八七六〜一九六三)や石川三四郎(一八七六〜一九五六)などと交流をもち、反戦の主張を仏教者の立場から貫いた。実現はしなかつたものの、石川三四郎を本学の講師として招こうとしたり、一九五四年には伊藤証信を招いて講演会を開いたようである。一九六七年に『禪と現代思想』、一九七〇年には『仏教者の戦争責任』を出版し、仏教者の戦争協力批判を展開した。曹洞宗の内山愚童を評価するなど、幅広い視点から近代仏教の研究を進めたといえる。その姿勢は作家水上勉や家永三郎などにも大きな影響を与えたといわれる。晩年は千葉県佐倉市に隠棲し、残念ながら花園大学ではその伝統は継承されなかつたが、最後の弟子となつた柏木隆法氏(本学卒業生)によつて研究は受け継がれた。柏木氏は、伊藤証信の『無我の愛』の全号復刻や日記の編纂、評伝の執筆、「大逆事件と内山愚童」の出版など、多くの業績を残された。さらに、自宅に伊藤証信の無我苑遺品や大逆事件関係史料など、今日的には入手がきわめて困難な史料を蒐集・保存されつつ、『中外日報』誌上などに精力的に成果を発表されている。その業績は、柏木氏の薫陶を受けた中川剛マックス氏(本学卒業生、同朋大学仏教文化研究所客員研究員)に継承されるとともに、各方面に影響を及ぼしている。

右に述べたように、花園大学での近代仏教史研究は途絶えたといわざるを得ないが、筆者自身、曹洞宗における内山愚童顕彰運動の一環に携わつた経験もあり、何らかの形で正木氏の努力や柏木氏の業績に呼応するような試みはで

きないかと考えた結果、二〇一二年の日本佛教学会学術大会開催を好機として、関係史料の展観を企画した次第である。わずか二日間ではあるが、国内の主だった仏教研究機関の関係者が集う大会での展観が、近代仏教研究の再認識につながることを念願して、内山・高木・峯尾の三師、および伊藤証信に関係する資料を、おもに柏木氏蒐集史料を中心として、本学歴史博物館において実施した。

大逆事件の概要

大逆事件とは、明治天皇の暗殺を計画したという理由で多数の社会主義者、無政府主義者が検挙、処刑された弾圧事件であり、幸徳事件ともいう。日露戦争反対を機に高揚した社会主義運動に対し、政府は機関誌の発禁や集会の禁圧、結社禁止などの抑圧を加え、一九〇八年（明治四十一年）六月の赤旗事件で堺利彦、大杉栄らの中心的人物を獄に送った。これ以後、実質的な運動はほとんど展開できない状況になり、一九〇九年五月に幸徳秋水、菅野すがらの創刊した『自由思想』も発禁の連続で廃刊を余儀なくされ、合法的な運動は不可能になる。

迫害に窮迫した彼らは急速に、直接行動・ゼネストによる革命の実現に突破口をみいだそうとし、とくに弾圧への復讐の念に燃えた菅野は、宮下太吉、新村忠雄、古河力作とともに、天皇の血を流すことにより日本国民の迷夢を覚まそうと爆裂弾による暗殺計画を練った。宮下は長野県明科の製材所で爆裂弾を製造し、一九〇九年十一月爆発の実験も試み、一九一〇年一月には東京・千駄ヶ谷の平民社で投擲の具体的手順を相談するが、幸徳は計画に冷淡で著述に専念しようとした。

取締当局はスパイを潜入させたりなどしてこの計画を感知し、一九一〇年五月二十五日の長野県における宮下検挙を手始めに、六月一日には神奈川県湯河原で幸徳を逮捕した。政府はこの長野県明科爆裂弾事件を手掛りに一挙に社

会主義運動の撲滅をねらって、幸徳が各地を旅行した際の革命放談などをもとに、大石誠之助らの紀州派、松尾卯一太らの熊本派、武田九平らの大阪派、さらに森近運平、奥宮健之、内山愚童ら二十六名を起訴するほか、押収した住所録などから全国の社会主義者数百名を検挙して取り調べた。

大逆事件には三人の僧侶が連座したが、内山愚童以外の高木顕明・峯尾節堂が和歌山県新宮在住であった。新宮では、進歩的文人にして医師でもあった大石誠之助のサロンがあり、時代を憂える青年が数多く集まっていた。峯尾は強烈な運動家というほどではなく、社会主義に好奇心があるという程度であったが、高木は檀家に被差別部落を抱えていたこともあり、社会的差別の解消に取り組んでいた。必ずしも強い連帯感で結びついていただけではなかったが、日露戦争中に高木は「余が社会主義」を著すなど、念仏と社会主義の融合する思想の持ち主であったようである。高木は、その肖像画を自坊に飾るなど、与謝野晶子を敬慕していた。新宮には熱心な「平民新聞」の読者が多く、一九〇九年に郷里土佐中村で静養していた幸徳秋水が、上京の途中に新宮で一か月ほど滞在し、熊野川で船を浮かべて親睦会を開くなどしたが、このことが大逆事件の発覚した段階では「熊野川の革命談義」であるとされ、後に「新宮グループ」呼ばれる犠牲者を生むことになった。売薬業をやっていた成石勘三郎などは、酒宴に惹かれて参加だけで無期刑に処せられ、その弟平四郎は大石とともに死刑となったが、新宮グループとされた被告たちは、幸徳秋水を有罪に陥れるための脇役につかわれただけで、実際には全員が無実の罪であった。

第二次桂太郎内閣下の平田東助内相、有松英義警保局長、平沼騏一郎司法省行刑局長兼大審院検事、松室致検事総長らの指揮により全国的な捜査、取調べと裁判が進められ、元老山県有朋をはじめ政府部内や枢密顧問官らの強い圧力を受けて、事件全体が終始政治的に取り扱われた。刑法第七十三条の大逆罪に問われたため、裁判は大審院における一番即終審で行われた。十一月一日予審意見書が大審院に提出されたのち、同九日公判に付すことを決定、厳重な警戒下、十二月十日から裁判長鶴丈一郎のもとで公開禁止の公判が開始された。弁護人は鶴沢聡明、花井卓蔵、今村

力三郎、平出修らであった。

公判はほとんど連日開かれ、十二月二十五日検事の論告があり、平沼は総論で「被告人ハ無政府主義者ニシテ、其信念ヲ遂行スルノ為大逆罪ヲ謀ル、動機ハ信念ナリ」と述べ、最後に松室が全員に死刑を求刑、二十七日から花井を先頭に弁護人の弁論があり、一人の証人を審問することもなく結審した。早くも一九一一年一月十八日に判決言渡しがあり、全員有罪で有期刑二名以外は二十四名が死刑とされた。翌十九日天皇の恩命として死刑被告中の坂本清馬・高木顕明・峯尾節堂ら十二名を無期懲役に特赦減刑、一方では異例の早さで二十四日には幸徳、大石、森近、宮下ら十一名を、翌二十五日に管野の死刑を執行した。無期・有期刑の十四名は秋田、諫早（長崎県）、千葉の各監獄に送られ、そのうち高木は一九一四年六月二十四日、浄土真宗大谷派による僧籍削除を苦に獄中で縊死し（五十一歳）、峯尾も一九一九年三月六日、千葉監獄において流感のため獄死した（三十五歳）。

幸徳が獄中で遺著『基督抹殺論』を叙述したほか、詳細な「陳弁書」で裁判批判を展開するほか、管野の「死出の道草」をはじめ、手記や遺書が書き残されている。管野がその手記に「今回の事件は無政府主義者の陰謀といふよりも、むしろ検事の手によって作られた陰謀といふ方が適當である」と記しているように、幸徳、管野、宮下、新村、古河の五人で協議され、しかも幸徳を除いた四人で実行策が練られただけの幼稚な天皇暗殺計画をフレーム・アップし、事件と直接無関係な社会主義者多数を巻き込んだこの事件は、桂内閣が社会主義運動の根絶をねらって仕組んだ史上空前の大弾圧であった。全国を吹き荒れた大弾圧の暴風により、社会主義運動は「冬の時代」と形容されるほど逼塞させられる。職業を奪われ、学校を追われ、生活を破壊されたりするなどして多くの転向者も出したが、わずかに生き残った社会主義者は、堺利彦らの売文社に閉じこもったり、大杉や荒畑寒村のように文学の場に身を寄せて『近代思想』を発刊したり、片山潜や石川三四郎のように亡命したりなどして「冬の時代」の寒風に耐えた。

この事件は政府の巧みなキャンペーンで一般社会に社会主義の恐ろしさを植え付けると同時に、文学者にも大きな

衝撃を与えた。徳富蘆花は一高で「謀叛論」を講演して幸徳らを殉教者と訴え、石川啄木は事件の本質を鋭く見抜いて社会主義の研究を進め、森鷗外や永井荷風は事件を風刺する作品を書いている。欧米の社会主義者も日本政府に多数の抗議電報などを送るなど、抗議運動を展開した。

一九六一年（昭和三十六）年、唯一人の生存者坂本清馬と、森近運平の妹栄子が東京高裁に再審の請求をしたが、一九六五年却下となった。柏木隆法氏による内山愚童研究の影響もあり、最終的には住職地である神奈川県箱根町大平台林泉寺住職木村正壽師の嘆願を受ける形で、一九九三年四月十三日に曹洞宗が内山の宗門攘斥を取り消して、正式に名誉を回復した。高木顕明についても、一九九六年四月一日に僧籍復帰（名誉回復）がなされ、浄泉寺を中心に再顕彰する「遠松忌」が催されている（遠松は浄泉寺の山号で高木の号）。同年九月二十八日には臨済宗妙心寺派でも峯尾節堂の攘斥処分を取り消し、僧籍を復活した。二〇〇一年八月二十五日には和歌山県新宮市で、「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」が結成され、九月の新宮市議会では大逆事件は冤罪だったとして、新宮グループ六人の名誉回復と顕彰を宣言する決議案を可決した。

伊藤証信の無我愛運動

伊藤証信（一八七六—一九六三）の「無我愛運動」は、明治以降に数多あった新興宗教の一つとして語られることも多いが、他とは一線を画すべき特異な宗教活動だったといえる。

証信は明治九年に三重県の農家の長男として生まれたが、十四歳の頃に自ら望んで真宗大谷派源流寺で出家した。真宗大学（現 京都大谷大学）に進学し、一時は清沢満之の影響を受けて、本山改革運動に参加したこともあったが、次第に宗教そのものに懐疑的になったようである。明治三十七（一九〇四）年、病床の父の枕元で神がかり状態とな

り、そのときの感動を「無我の愛」と名付け、東京巢鴨の大日堂で自給自足の生活をはじめ、巢鴨の森を「無我苑」と名付けるとともに、翌年には機関紙『無我の愛』の発行を開始した。同紙巻頭に掲げられた「確信文」には、「吾人は仏教なるが故に信ずるに非ず、基督教なるが故に信ずるに非ず、只、絶対の真理なるが故に之を信ずる也、何をか絶対の真理といふ、曰く云い難し、且く語を籍り無我の愛と名付けんか」と述べ、親鸞の説く他力本願とトルストイの人類愛を融合させ、自らの実践を通じて主体性の解放を説いたとされる。

『無我の愛』の反響はきわめて大きく、購読者が急増するとともに来園者も増え、若き河上肇も一時期にせよ入苑していたことは有名である。堺利彦、石川三四郎などの社会主義者も、無我苑を訪れて語り合ったようである。一方で真宗大谷派からは、異安心として中止命令を受けるなどしたため、証信は僧籍を返上するとともに大学研究科も退学してしまった。徳富蘆花・幸徳秋水・堺利彦らは、証信の行動を称賛したと伝えられる。

その後、証信自身の思いとは別に、無我苑の教団化と拡大による質的低下があったため、足尾銅山の鉱毒問題に奔走する田中正造に会ったことを契機として、無我苑を閉じて運動を停止してしまった。

その後四年間、赤松照幢（与謝野鉄幹の実兄）に招かれて、山口の徳山女学校で教鞭を執るとともに、医師竹内朝子と結婚し、再度上京して運動を再開するが、巢鴨時代ほどには振るわなかったらしい。大逆事件に際しては、かつて交流のあった大石誠之助や内山愚童が死刑に処せられたため、「大逆事件の啓示」と題する論文を発表して罰金刑に処せられたが、納入を拒否して入獄した。伊藤証信の無我愛運動は断続的に五十年以上続くが、熱烈な天皇崇拜者であったために終戦後に批判を受け、多くの信者が離反する中で、妻朝子をはじめとする周囲の理解者が相次いでなくなり、碧南市に移転していた無我苑が伊勢湾台風で被害を受けたこともあって、運動は事実上の終焉を迎えた。

宗教法人による教団化を奨められることもあったが、「教団は宗教を墮落させられる因である」として最後まで拒み続け、一代でその運動は終わった。その交流の範囲はきわめて広く、左翼知識人に限らず民族派の活動家、インド

独立の志士ラス・ビハリ・ボース（新宿中村屋創始者相馬愛蔵の娘婿）や中国の張作霖、韓国の民族主義者朴烈などもいた。

今回の企画を実現するに際し、柏木隆法氏のほか、高木の住職地である和歌山県新宮市の浄土真宗大谷派浄泉寺住職山口範之師、大逆事件で有罪判決を受けた成石兄弟の菩提寺である、田辺市の曹洞宗祐川寺住職丹羽達宗師より、未公開のものを含めて貴重な史料をお借りすることができた。また真宗大谷派解放推進本部の訓覇浩師などからも写真パネルの提供などの御支援を頂戴した。さらに中川剛マックス氏には、史料解説の作成をはじめ、当日の列品解説など、多大な御協力を戴いた。それぞれ記して甚深の謝意を表したい。

筆者自身、専門とする領域はあくまで日本中世禅宗史であり、今回展示した史料の意味や価値について、十全の活用は能力に余るものであるが、今後、近代仏教史に関する史料の保全と研究に、多くの関心が向けられることを期待し、また図録を作成するゆとりがなかったこともあり、記録のために本誌に展覧目録を掲載させて戴くことにした。また本稿の内容においても、特に伊藤証信の「無我愛運動」に関する記述は、基本的に柏木隆法氏の研究成果を引用させて戴いたものである。

【参考文献・論文】

柏木隆法『大逆事件と内山愚童』

一九七九年、JCA出版

柏木隆法『伊藤証信とその周辺』一九八六年、不二出版

池田英俊『内山愚童の生涯と思想運動』

一九八一年、同朋舎出版

石川力山『内山愚童集』（『曹洞宗選書』六）

（『曹洞宗教義法話大系』二十五）一九九〇年、同朋舎出版

石川力山「内山愚童と近代禅思想 戦争・差別・人権
に対する仏教者の視座をめぐって」

〔宗学研究〕三十四 一九九二年、曹洞宗宗学研究所

石川力山「禅僧の社会意識について ―近代仏教史に

おける武田範之・内山愚童の位置づけをめぐって」

〔日本佛教学会年報〕六十一 一九九六年、日本佛教学会

『仏種を植ゆる人 ―内山愚童の生涯と思想―』

二〇〇六年、曹洞宗人権擁護推進本部編

神崎 清『革命伝説 大逆事件』

二〇一〇年、子どもの未来社

大東 仁『大逆の僧 高木顕明の真実』

二〇一一年、風媒社

『大逆事件と今村力三郎』

二〇一二年、専修大学今村法律研究室編

【展観目録】

	資 料 名	法 量	筆者・発給者	年 代	備 考
	新宮市 浄泉寺所蔵史料				
1	画文「しのぶれど…」	一軸	高木顕明(遠松)		
2	「与謝野晶子像」	一軸	西村伊作画		大石誠之助からの贈り物、裏に由来書き
3	六字名号	一枚	蓮如		顕明の裏書きあり(1905年か)
4	六字名号	一枚、付袋	高木顕明		袋に大石との会話記録あり
5	俳句「朝陽立つ…」	一葉	高木顕明(遠松)		
6	俳句「桜咲く…」	一葉	高木顕明(遠松)		
7	俳句「行春の…」	一葉	高木顕明(遠松)		
8	俳句「君ゆかば…」	一葉	高木顕明(遠松)		
9	俳句「我をすてて…」	一葉	高木顕明(遠松)		
10	短冊「錦」	一葉	高木顕明(遠松) 画		
	田辺市 祐川寺所蔵史料				
1	『碧巖集』	袋綴、一冊	成石勘三郎(空庵) 筆	昭和4年(1929)	
2	『歎異抄』	仮綴、一冊	成石勘三郎(空庵) 筆	大正5年(1916)	

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			3
書「鷓鴣紫陌…」	書	書「至誠」	和歌「語らずや…」	和歌「ここのえの…」	画「傘に蛙」	書「花爛漫…」	書「萬物静…」	書「假樂君子…」	和歌「あめりかへの…」	和歌「しののめの…」	書「自己の運命を…」	書「無我愛」	土岐市 柏木隆法氏所蔵史料		『法華経』（大学ノート）
一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸	一軸		八卷三冊	
張作霖	ラス・ビハリ・ボース	井上日召	堺利彦	沖野岩三郎	真溪涙骨、関精拙	江部鴨村	加藤咄堂	赤松連城	眺鳥敏	与謝野晶子	伊藤證信	伊藤證信		成石勘三郎（空庵）筆	
							甲戌初冬		昭和4年（1929）					1926～27	
張学良の父	新宿中村屋創業相馬家の婿、インド独立運動家	自称日蓮主義の僧侶で右翼テロリスト	思想家、小説家	明治、昭和の社会主義者、思想家、小説家	大逆事件がモデルの小説『宿命』、牧師作家	大正、昭和の仏教学者、大谷大教授など歴任	真溪は中外日報創設者、関精拙は天龍寺管長	明治期の仏教学者、中外日報論説記者	明治期の真宗本願寺派の僧、大教院反対運動	明治、昭和の大谷派僧侶、清沢満之に師事				第三冊末尾に写経由来を付す	

29	伊藤證信宛ハガキ	一葉	市川房枝	昭和21年 (1946)	女性問題運動家、政治家
28	伊藤證信宛書簡	筒二枚、付封	倉田百三	昭和15年 (1940)	『出家とその弟子』
27	伊藤證信宛書簡	筒一枚、付封	南条文雄	昭和14年 (1939)	戯曲家、評論家、一灯園信者、講師、大谷大学学長
26	伊藤證信宛書簡	筒一枚、付封	高楠順次郎	昭和13年 (1938)	仏教学者、東京帝国大学教授、東洋大学学長
25	伊藤證信宛ハガキ	一葉	島地大等	昭和2年 (1927)	仏教学者、默雷の養子、『天台教学史』の著者
24	伊藤證信宛ハガキ	一葉	常盤大定	明治41年 (1908)	中国仏教史研究者、『中国文化史蹟』の著者
23	伊藤證信宛ハガキ	一葉	椎尾弁匡		上寺法主
22	伊藤證信宛ハガキ	一葉	堺利彦		仏教学者、大正大学学長、増上寺法主
21	伊藤證信宛ハガキ	一葉	暁烏敏		
20	和歌「梅などは…」	一葉	与謝野鉄幹		
19	和歌「二人して…」	一葉	与謝野晶子		
18	俳句「むこ殿の…」	一葉	伊藤朝子		伊藤證信の妻
17	和歌「いやたかき…」	一葉	伊藤證信		
16	写真「桂香巖・常盤大定・伊藤證信他一名」	一葉		昭和元年 (1926)	
15	写真「伊藤證信・和田幽玄・安藤現慶」	一葉			
14	写真「伊藤證信・朝子」	一葉		昭和30年 (1955)	

45	伊藤證信宛書簡	筒一枚、付封	内山愚童	明治38年(1905)	
44	〔無政府共産〕(原本)	一冊	内山愚童	明治41年(1908)	
43	写真「内山愚童形見硯箱」	二葉			
42	写真「内山愚童」	一葉			
41	萬教協和聯盟創立発起人及賛成人芳名録	一冊			著名な仏教学者、キリスト者、作家などの記名
40	伊藤證信宛ハガキ	一葉	河上肇夫人	明治39年(1906)	
39	伊藤證信宛書簡	四枚、封筒無し	河上肇		元京都大教授、経済学者、一時無我苑に入る
38	伊藤證信自筆原稿一括		伊藤證信		
37	岩波書店海野友寿宛書簡(含：七言律詩)	筒三枚、付封	朴烈		明治、昭和の美学者、宗教哲学者、白樺派
36	伊藤朝子宛書簡	封筒のみ	柳宗悦		朝鮮の社会運動家、無政府主義、テロリスト
35	伊藤證信宛ハガキ・書簡	一葉、四枚	谷口雅春	葉書は昭和27年	「生長の家」創始者
34	伊藤證信宛ハガキ	一葉	秋田雨雀	昭和29年(1954)	劇作家、小説家、エスペ란ト語の普及に努める
33	伊藤證信宛書簡	筒一枚、付封	江部鴨村	昭和29年(1954)	還俗、社会運動家
32	伊藤證信宛ハガキ	一葉	市川白弦	昭和27年(1952)	花園大学名誉教授、定年後に
31	伊藤證信宛ハガキ	一葉	石川三四郎	昭和26年(1951)	キリスト教徒で社会運動家、アナキスト、作家
30	伊藤證信宛書簡	封筒のみ	武者小路実篤	昭和22年(1947)	白樺派の小説家、詩人、「新しき村」の人道主義

60	69	58		57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
中手記) 峯尾節堂「我懺悔の一節」(獄)	峯尾節堂覺書(『大逆事件』二)	「幸徳一派 大逆事件顛末」	以下、出版物	色紙「伊藤證信似顔絵」	色紙(津田青楓画に寄せ書き)	色紙「未帰還の…」	色紙「大陸の…」	色紙	色紙「和」	和歌「我が佛と…」	俳句「勿体なや…」	和歌「…」	和歌「古き世に…」	伊藤證信宛ハガキ	伊藤證信宛ハガキ
一冊	一冊	一冊		一枚	一枚	一枚	一枚	一枚	一枚	一葉	一葉	一葉	一葉	一葉	一葉
神崎清	今村力三郎訴訟記録31卷	宮武外骨		市村某	赤松月船、和田幽玄他	森田草平	平塚らいてう	賀川豊彦	梨本宮方子	江渡狄嶺	大谷句仏	倉田百三	中村久子	沼波政憲	内山愚童
昭和39年(1964)	2002年	昭和21年(1946)		昭和11年(1936)	昭和7年(1932)									昭和29年(1954)	明治39年(1906)
	元専修大学総長、大逆事件の弁護士の一人	明治、昭和のジャーナリスト、新聞史研究者			赤松は曹洞宗の僧で詩人、和田は中外記者		思想家、フェミニスト、女性解放運動の指導者	大正、昭和のキリスト教社会運動家	元皇族、旧大韓帝国元皇太子李垠の妃	明治、昭和の農民思想家	東本願寺第23代法主、句仏は俳号		両手足切断の芸人、作家、ヘレン・ケラーと会う	教師、内山の最後に立ち会う	